

森のふくろうへの独言 V

小田 富 英

届くか

わが無音の独言

聴けるか 翁の再生の詩

去年の夏までと違い

川風に人を追うことなく

うつせみの命を惜しむ

荒波うつ浜に身をおいた

若き翁の傷心の旅

類くない

夕風夕月の夜の風情に

身を沁めた旅の哀れよ

曲線描く白浜から見

沖の黒き潮の果てに

一年前の

熱き思いの

重なり来たる

言の葉の二枚三枚

未だはつきりと

浮かんで見える

この浜にうち寄せる

南からの贈り物のことは

翁だけの物ではない

あの頃は誰もが思い描いた

ロマンでありドリームであったはず

忘れてはならないのだ

二億年前の放散虫のさわさわというつぶやきから

逃れられないロマンの運命を

岬の突端で

出会った婆は

自らの母であったのか

川風の人を忘れ

婆の言の葉に包まれる

たまづきの磯、恋路が海の名は今も残るが

翁が願わしきものは平和なりと折った石門

その窓から今も平和は見えない



角

詩誌

角

第62号